

NEWS
LETTER

vol.51
2015.3.1

日本老年行動科学会



Japanese Society for Behavioral Sciences of the Elderly

contents

2

巻頭言

2015年度活動予定

4

研究助成を受けて

6

定時総会・総会記念講演のお誘い

7

支部だより●愛媛支部

第18回(気仙沼)大会のご案内

8

2015年度スケジュール

年 が改まり、はや、3月。

「今年こそは……」と思っていた新たな思いが、いつのまにか、薄れてしまってきている自分を感じます。

「いやいや、まてまて、3月は、卒業式・修了式があって、区切りの月でもあり、4月は、入学式や始業式で、新たな門出でもあるし、新年度を新たな気持ちで迎え、いろいろな仕事もこなしていこう……」と、はや、仕切り直しを考えている

ポジティブ(?)な自分がいます。

さて、今年の学会の活動ですが、大きなイベントとしては、10月31日、11月1日に第18回気仙沼大会が予定されています。大会の大きなテーマを「もし、震災が起こったら——教えてください!! 気仙沼の皆さん」に設定しました。東日本大震災から5年目を迎えようとしています。気仙沼の地で気仙沼の皆さんからいろいろなことを教えていただきたいと思っています。ぜひ、

巻頭言

大川一郎
Okawa Ichiro

大勢の会員の方のご参加をお願いいたします。

学会誌では、今年度は、通常の20巻の発刊に加えて、事例検討委員会の編集による特別号を予定しています。大きなテーマとしては、現在、事例検討委員会で進めている「ステップ式仮説検証型事例検討」についてのまとめとなる特別論文と筑波大学の山中克夫先生が日本での展開を精力的に進めておられる「認知活性化療法」の紹介となる特別論文の2本立てでの特集を予定していま

す。ご期待ください。

上記だけではなく、委員会からの報告にありま

す様々な活動が今年も予定されています。何卒、会員の皆様のご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

学会案内のパンフレットを作成しました。このニュースレターと一緒に皆様にお届けします。もし、学会の案内としてご活用いただけます場合、学会事務局までご連絡ください。パンフレットをお送りいたします。

2015 活動予定

各委員会より

研究委員会

2015年の研究委員会の活動予定について、お知らせしたいと思います。

1 **今年で第3回となる「若手研究者への研究助成」制度の充実をはかる……**多くの方々から応募が集まるように、工夫をしていきたいと思ひます。

2 **本学会の研究倫理綱領を策定する……**ほとんど完成しておりますので、今年こそ皆様にご披露したいと思ひます。

3 **実践と研究とが協力しながら行える研究を立ち上げる……**研究委員会としても検討しますが、会員の方で本学会らしい研究計画をお持ちの方、ぜひご連絡ください。

以上、3点を考えております。これらは多くの会員の皆様の協力が必要です。どうか積極的に研究委員会の活動にご参加ください。

岡本多喜子

活動推進委員会

活動推進委員会の役割は、文字どおり学会の活動の推進にあります。それぞれの委員会が担っている活動をバックアップし、さらに活性化できればと思っています。さて、本年度の活動内容ですが、会員や外部に向けて、下記の講座、および事例検討委員会と連携しての勉強会を企画の予定です。

- **講演会……**研究者向け(1回)、実践者向け(1回)
- **事例検討委員会と連携した勉強会……**脳科学関連、方法論関連(2回ほど)

会員の皆様とこれらの講座や勉強会などの活動を通して、連携を深めていくためのお手伝いをしたいと思ひます。ご協力賜りますようお願い申し上げます。

本田憲康

事例検討委員会

事例検討委員会でこれまで展開してきた「日本老年行動科学会方式・ステップ式仮説検証型事例検討」の論文文化を現在進めています。会員の皆様に、その概要、具体的な進め方、分析についての新たな提案など、わかりやすくお伝えしたいという思いの中で、委員が定期的に集まり、喧々諤々とした議論を行い、方式の精緻化を行い、さらに、その内容を論文に反映していっています。

今年になって、2つの学会「日本臨床発達心理士会」「日本介護福祉学会・関東ブロック」からオファーをいただき、研修会を行いました。大きな関心を持っていただき、学会へ入会いただいた聴講の方もおられました。「ステップ式仮説検証型事例検討」の手応えを感じ始めています。

大川一郎

学会誌編集委員会

学会誌「高齢者のケアと行動科学」が本年度で通算第20巻となります。そこで、第20巻では通常号に加えて特別号を発行する予定で準備を進めています。特別号では、大川会長を中心に進めている「ステップ式仮説検証型事例検討」に関する論文などを予定しています。また、通常号は投稿論文を中心に編集を進める予定です。編集委員会では審査の迅速化を実現していますので、これからご投稿いただいた論文でも第20巻通常号に掲載される可能性があります。学会員の皆様には奮ってご投稿下さるようお願い申し上げます。

佐藤真一

ニュースレター委員会

今年のニュースレターは51号(3月1日)、52号(6月1日)、53号(10月初旬)、54号(12月1日)発刊の予定です。53号は学会の日程(10月31日)との関係で例年より1か月遅れになります。

会員に学会活動関連のニュースを定期的にお届けするのが第一の役目ですが、少し範囲を広げて、皆様により関心を持っていただく紙面づくりをしたいと思ひます。そのためには皆様のご協力が必要です。どうぞ、現場での取り組み、新しい研究、実践者・研究者として想うこと等々お寄せ下さい。

荒木乳根子・尾崎純郎

日本老年行動科学会 **研究助成** を受けて

 **大庭輝** [大阪大学大学院人間科学研究科]

認知症に関する専門的知識を有する 介護職員の心理学的特徴の検討

本研究では、認知症に関する専門的知識を有する介護職員の心理学的特徴について検討しました。認知症ケアは高い専門性が求められると考えられますが、介護保険法において介護職の資格基準というのは設けられておらず、無資格でも従事することが可能です。そのため、現状において介護職員の知識水準は一定の質が担保されておらず、勤めてからの自主的な学習が極めて重要と考えられます。そこで、本研究では2つのリサーチクエスチョンを設定しました。一つは、介護職員の認知症の知識はどの程度あるのか、そしてもう一つは認知症の知識を有する介護職員はどのような特徴を有しているのか、ということです。知識を有する職員の特徴として、本研究では内発的動機づけとその源泉となる有能感に着目しました。

調査は近畿圏および関東圏にある5つの介護保健施設に勤める介護職員210名（女性150名、男性58名；平均年齢42.6（±13.1）歳）を対象に行いました。認知症の知識を測定する尺度として、Kazui et al (2008) による Professional Knowledge Test (PKT) を予備調査で修正した57項目を用いました。これは、認知症に関する医学的知識、ケアの対応法、アクティビティ、制度など、認知症に関する多面的な知識を尋ねる尺度です。有能感の測定とし

て蘇ら (2005) の介護職員の仕事の有能感尺度12項目、動機づけの測定として岡田・中谷 (2006) の大学生用学習動機づけ尺度34項目について項目表現を一部修正して用いました。

結果として、介護職員の認知症の知識には基本的な要因として正規職員であること、介護福祉士の資格を有していること、認知症に関する自主学習の頻度が多いこと、が影響していました。認知症の知識と有能感、動機づけとの関係性を検討したところ、有能感が高まることで、内発的動機づけが喚起されたり、自主的な学習の頻度が増えることによって認知症の知識の増加につながることを示されました。

本研究で示された結果は、介護職員の認知症の知識の普及度を明らかにしただけでなく、これからの介護教育に役立つ資料になると考えられます。また、介護職員の有能感を高めることが認知症の知識を増やすためには重要であることが示唆されました。有能感は自己の能力の発揮や成長、問題の予測や解決などができると感じる能力です。介護職員に対する学習機会の提供や職場環境、配置基準など制度面を含めた改善が重要なというまでもありません。しかし、介護職員の有能感を高め、一人ひとりが専門職としての価値を見出し、自らの知識や技能を実践に活用するよう研鑽を積んでいけるようなシステム作りがより求められていくと考えられます。

最後になりますが、本研究を実施するにあたって助成金を賜りました日本老年行動科学会に心より御礼申し上げます。

 **戸名久美子** [星ヶ丘医療センター]

自宅でも簡単に？ 手軽なマス計算を使用して、 注意機能のスクリーニングを目指す

平成25年度研究助成期間が終わって1週目の大安吉日の夜、お金をいただいて研究をさせていただくプレッシャーから解放され、ホッとしながらニュースレター原稿をしたためております。いえいえ、まだ、論文提出という大きな仕事が残っていますが、期限の1年内にまとめあげたいと思っています。貴重な機会を与えてくださり本当にありがとうございました。感謝の気持ちでいっぱいです。

さて、本研究は『健常高齢者におけるマス計算遂行能力と認知機能の関連について』です。目的は、①健常高齢者がマス計算をどのくらいのスピードでこなせるか、通常の計算式、マス計算を行うにあたって必要な認知機能は何か、の2つを調べることです。結果、①50問の通常計算、マス計算をするのに必要な時間の平均はそれぞれ68.97秒、80.72秒。マス計算にかかる時間の方が有意に長かったです。②通常・マスの両計算課題を50問遂行するには、注意機能、抑制機能、ワーキングメモリといった認知機能が必要であると示唆されました。また、この結果を用いて、そしてさらなるデータ分析を重ねて、手軽に認知機能の中の注意機能をスクリーニングできるようになるのではないかと考えています。計算課題をスクリーニングとして使用する利点は、簡単な計算を用いているため、特別な様式や刺激を用意する必要がない点、そして特殊な環境の設定が不要で、一般的な場面にて実施可能であるという点があげられます。この取り扱いの簡便さは、ケアの現場のみならず一般家庭でも注意機能の測定が可能になることにつながると期待できます。今回、注

意機能や前頭葉機能の検査として、“FAB”、“新ストループテスト”、“TMT”、“仮名ひろいテスト”、“CATより抜粋した課題”を使用しました。ニュースレターをご覧になっている皆様は、これらすべてを「知ってるよ」「使ったことがあります」とおっしゃる方が多いでしょう。しかし一般の方々には「TMTって何？」という方がほとんどではないでしょうか。ところが、計算課題であれば「マス計算？ ああ、子どもがやってるわ」などと馴染みもあり、興味を持っていただきやすいのではないかと思います。

最後になりますが、臨床の現場はコスト管理が厳しく言われます。昨今、特に顕著で業務に時間的余裕もない状況です。その中、研究を行うのは大変ですが、この制度のおかげでゆとりがもてました。刺激の提示用にタブレットを購入したのですが、研究期間後も患者さんとインターネットを見ながら話はずまっています。当院ST室の環境がグッと上がりました。ぜひ皆様もこの制度を有効利用し、ケアを研究につなげてください。

 **神田尚** [筑波大学社会人大学院等支援室]

高齢者に対する事例研究における 行動評価の定式化の試み

これまでの高齢者のシングルケーススタディにおいて、行動の生起頻度の時系列データを検討する際には、一般的に日々の生起回数やその平均値などの視覚的判断法が用いられてきました。そして、そのような視覚的判断法は、その行動の日々の変動や平均値を用いて効果の大きさを判断してきました。しかし、平均値は、外れ値の影響を受けやすい点が指摘されています。また、統計的検討も行われていないことが多いため、客観性に欠けるという指摘もされています。本研究では、平均値については中央値

に基づいた中央分割法を、統計的検討についてはランダムマイゼーション検定を用い、高齢者のシングルケーススタディにおける分析モデルを探索しました。また、このモデルの有効性を検討するために、実際のシングルケーススタディ(田中・大川ほか、2013)に当てはめ再検討し、モデルの適合性を検討しました。

その結果、視覚的判断法で示された結果について、ランダムマイゼーション検定によって有意差が示され、統計的に確認ができました。また、従来の視覚的判断法では、生起頻度とその平均の差異を中心に検討していましたが、中央分割法を用いることにより、ターゲット行動がベースライン期、介入期それぞれの傾向ラインの傾きによって、それぞれの期間中の行動の変化の様子が容易に把握できることが明らかになりました。このことから、従来の視覚的判断法が、介入効果の実感による観察者の臨床経験に依存するのに対して、この分析モデルは、臨床経験が少ないものでも統計的検討でデータを絞り込み、対象となるデータに視覚的判断法を用いて

詳細に吟味し、臨床的知見と合わせて総合的判断が可能であることが示されました。

さて、この分析モデルで用いたランダムマイゼーション検定は、パーソナル・コンピュータの性能の向上により、容易に行える検定ツールとなりました。また、中央分割法による傾向ラインの作図は、特別なソフトウェアがなくとも、Excel上や一般的な方眼紙上で行うことができます。言い換えれば、特別な訓練を受けた専門家でなくても、簡便に作図や統計的評価が行えることになるのです。簡便に行えるとはいえ、本研究ではExcelなどがある程度利用できることを前提としているため、簡便と感ずるかは、担当者のパーソナル・コンピュータのスキルに左右されることが否めません。このことから、多様なスキルの担当者が分析を行うためには、スキルに左右されない分析や作図が行える仕組みが必要となります。よって、誰がデータを入力しても、自動的に作図や検定が作成されるようなソフトの開発が求められるところで

す。



定時総会 総会記念講演のお誘い

先般、会費振込のお願いとともにご案内いたしましたように、3月29日(日)に2015年度定時総会が筑波大学東京キャンパス文京校舎で開催されます。議事内容は、本学会の活動・事業についてのご報告、2014年度の決算および予算などのご審議をお願いする予定です。

皆様方から頂戴しました貴重な会費を有効に活用したいと担当者一同、努力を重ねておりますが、さらなる学会の発展のためにお知恵を拝借いたしたく存じます。年度末のお忙しい時期と思いますがお繰り合わせのうえ、ご参加くださいますようお願いいたします。

また、総会後は「利用者も参加者も共に楽しむ認知活性化療法」をテーマに山中克夫先生(筑波大学人間系准教授)のご講演があります。認知活性化療法は、認知症ケアに注目されはじめた療法です。ぜひ楽しみになさってください。

事務局長・中村淳子



支部だより 愛媛支部

野本ひさ [愛媛大学]

今回「支部だより」への寄稿を拝命いたしました。恥ずかしながら愛媛は未だ支部結成に至っておりませんが、2004年と2013年の過去2回、愛媛大会を開催いたしました。ご縁により、愛媛の様子を紹介させていただきます。四国唯一の拠点である愛媛は、2000年の初めの頃、河野保子先生の求心力の元に看護系の会員が集まりました。いつかは愛媛を支部にと、志高く活動させていただいています。が、愛媛の学会員が他県に転出することも多く、現在は細々とお留守番をさせていただいているような次第です。完全休眠にならないよう、何かしら高齢者ケアと実践の架け橋を意識し、日々研鑽しています。

最近の私の関心は、高齢者夫婦の余暇活動に向いています。熟年夫婦が第2の蜜月をどのように過ごすのか、夫婦のコミュニケーションや余暇活動の選択などについて探究しています。夫婦の満足感と夫婦間コミュニケーションの関係を探ってみると、コミュニケーションの量がお互いの関係の満足感に影響していることは当然の結果なのですが、夫と妻の双方が望むコミュニケーションスタイルには少々違いがあることがわかりました。たとえば、夫は「食事」「入浴」など生活場面の共有をよいコミュニケーションと感じているのに対し、妻はコミュニケーションの頻度が満足感に影響を与えるようです。このように、夫婦の生活の、些細だけれども重要な場面に焦点を当てることで幸せな長寿への手がかりを得たいと考えています。いつかの機会に学会員の皆様と議論を交わせたらい幸いです。

ご案内

日本老年行動科学会 第18回(気仙沼)大会

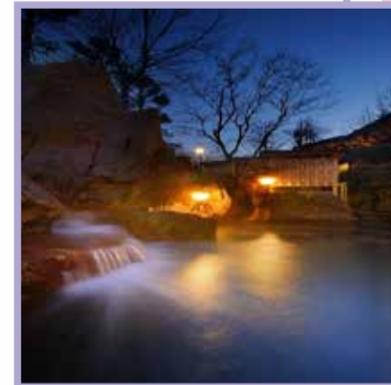
大会長◆大川一郎

日本老年行動科学会は、2011年より、気仙沼での支援活動に「気仙沼市支援医療・福祉関係5団体(代表・高橋龍太郎、事務局長・菅原康宏)」の一員として関わってきました。今回の大会では、初めての共催ということで、名誉大会長を高橋龍太郎先生(東京都健康長寿医療センター研究所副所長)にお願いし、5団体との共催で企画・運営をしていきます。

大会日程◆◆◆2015年10月31日(土)~11月1日(日)

会場◆◆◆気仙沼ホテル観洋

プログラムの内容としては、初日の「基調講演」「特別講演」「シンポジウム—教えてください!! 次に震災が起こったら」、お待ちかねの「懇親会(虎の舞の演舞も予定しています)」、2日目の「研究報告・実践報告」「ワークショップ」を予定しています。詳細につきましては、今後、大会案内、ニュースレターなどで適宜ご案内していきます。奮ってのご参加をお待ちしています。





日本老年行動科学会 2015年度スケジュール

月	日	行事	場所	時間
2月	8日(土)	会計監査	筑波大学文京校舎	
	28日(土)	第1回執行部・運営役員会	筑波大学文京校舎	
3月	初旬	ニュースレター51号発刊		
	7日(土)	第1回常任理事会	筑波大学文京校舎	16:00～
	29日(日)	第1回理事・評議員会	筑波大学文京校舎(119教室)	13:00～
		定時総会	筑波大学文京校舎(119教室)	14:10～
		記念講演	筑波大学文京校舎(119教室)	15:10～
懇親会		筑波大学文京校舎(430教室)	17:00～	
5月	初旬～中旬	第2回執行部・運営委員会	筑波大学文京校舎	
6月	初旬	ニュースレター52号発刊		
	初旬	気仙沼大会案内発送		
7月	初旬～中旬	第3回執行部・運営役員会	筑波大学文京校舎	
9月	初旬～中旬	第4回執行部・運営役員会	筑波大学文京校舎	
	下旬	第2回常任理事会	筑波大学文京校舎	
	下旬	「高齢者のケアと行動科学」 20巻1号(特別号)発刊		
10月	初旬	ニュースレター53号発刊		
	30日(金)	第2回理事・評議員会	気仙沼ホテル観洋	
	31日(土)	第18回(気仙沼)大会	気仙沼ホテル観洋	
11月	1日(日)	第18回(気仙沼)大会	気仙沼ホテル観洋	
	中～下旬	第5回執行部・運営役員会	筑波大学文京校舎	
	下旬	「高齢者のケアと行動科学」 20巻2号発刊		
12月	初旬	ニュースレター54号発刊		
	初旬	第6回執行部・運営役員会	筑波大学文京校舎	
	中～下旬	第3回常任理事会	筑波大学文京校舎	

日本老年行動科学会

<http://www.jsbse.org/>

東京都杉並区和田3-30-22 大学生協学会支援センター内 ● TEL03-5307-1175 ● FAX03-5307-1196 ● jsbse@univcoop.or.jp